

平成 21 年 3 月 26 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18520571
 研究課題名（和文）古代スパルタの国家構造の再検討：ペリオイコイ研究の視角から
 研究課題名（英文）A Reconsideration of the State Structure of Ancient Sparta: From a Perspective of Perioikic Study

研究代表者

古山 正人（FURUYAMA MASATO）
 國學院大學・文学部・教授
 研究者番号：20181472

研究成果の概要：ほぼ前6世紀半ばにスパルタ国家の基本構造が固まったが、ペリオイコイがラケダイモン人国家に統合されるのもこのときと考えられる。スパルタを中心集落として、スパルタ市民の国家とポリス・スパルタに従属しつつ、独立して多中心的構造で存在していたペリオイコイ諸地域がラケダイモン人の国家に統合される。軍事的には、職業的兵士化したスパルティアタイとは同じ部隊を形成せず、ポレマルコスの指揮を受けつつ、ペリオイコイが別部隊を形成し、王の指揮下に統合されていた。

交付額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2006年度 | 1,400,000 | 0 | 1,400,000 |
| 2007年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2008年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,400,000 | 600,000 | 4,000,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：スパルタ：ペリオイコイ：ラケダイモン人：前6世紀：ポリス

1. 研究開始当初の背景

(1)従来のペリオイコイ研究は主として文献資料に基づいて研究されてきた。その結果として、個々のペリオイコイ都市の置かれている景観、ペリオイコイ都市に編入された歴史的経緯は省みられずに、ペリオイコイ身分総体として、その政治的経済的状況がスパルタとの関係で議論さ

れてきた。

(2)1990年代に入るとペリオイコイ研究はG.Shipleyを筆頭に活発化し、新しい状況に入った。その中でもShipleyの97年の研究は画期的であった。個別ペリオイコイ集落の文献的考古学的情報が網羅的に提供され、ペリオイコイ集落を全面的に再検討することで、スパルタの国

家構造を新たに問い直すことが可能となった。

2. 研究の目的

(1)1930年代より実施されてきたイギリスによる発掘の考古学的知見を基礎にして、ペリオイコイ遺跡の表面踏査を踏まえて、個別ペリオイコイ都市の存在状況を可能な限りつまびらかにする。

(2)Shipley ラコニアの北部国境地帯は独自の政治的地位を有しているとの仮説を検証する。彼はラコニアの構造を歴史的経緯と地理的条件をもって説明するとともに、ラコニアの北部国境地帯は独自の政治的地位を持っていることを論証することで、従来の見解に修正を迫る。スパルタの政治構造を再検討することによって古代ギリシアに展開した国家類型についての理解をより豊かにすることが可能となる。

(3)近年のペリオイコイ研究は Hansen の主宰するコペンハーゲン・ポリス・センターによるポリス概念の再検討に触発され、またイギリスの在アテネ考古学研究所を中心とした、ラコニア調査プロジェクトの最終成果が公表された状況を受けたものである。そして、欧米の研究の展開に即応しつつ、同レベルの研究成果を生み出そうとする企てである。

3. 研究の方法

(1)従来の研究を精査し、ペリオイコイ研究のこれまでの成果を明らかにすると共に、今後課題を探り、その解決を図る。とりわけ「ラケダイモン人の国家」をどのように定義するかが最大の課題である。

(2)Shipley,G.,The Other Lakedaimonioi : The

Dependent Periolic Poles of Lakonia and Messenia や *Lakonian Survey* vol.1 and 2 および Copenhagen Polis Centre Project, *A Gazetteer of Archaic and Classical Poles*. The Section on Lakonia and Messenia に依ってラコニアとメッセニアの地方集落・景観についての情報を入手・整理する。この作業によって得られた知見を基礎に、ラコニアとメッセニアのペリオイコイ集落の景観を調査する。

(3)ラコニアとメッセニアの集落のデータを通時的に検討し、ペリオイコイ集落と認定することの可否を判断する。その結果として、スパルタの版図が拡大していく過程が解明されると共に、ペリオイコイ制度の起源を探り、「ラケダイモン人の国家」の形成過程、特質を明らかにする。

(4)「ラケダイモン人の国家」の定義にはペリオイコイ共同体をどのような種類の共同体と定義するかという問題が密接に関わっている。その問題はポリスとアウトノミアの関係とも切り離せないもので、Lex Hafniensis de Civitate についても検討する。

4. 研究成果

(1)既公表のペリオイコイ研究関連論文から浮かび上がってくることは、メッセニアの喪失まで維持されたラケダイモン人の国家の版図が確定した時期が前6世紀半ばであるという事実である。前546年頃の「勇士の戦い」によって北部キュヌーリア=テュレアティスはスパルタ領に併合された。北部国境地帯は第2次メッセニア戦争後スパルタ領に漸次的に編入されていったと思われるが、それが安定化したのはテゲアとの同盟を画期としたであろう。固有のペリオイコイ集落の北限の1つセツラシアは前古典期後期に植民によって建設された可能性が指摘されている。キュテラのラコニアへ

の併合時期は明確にならないが、前 7 世紀の内という可能性が強いと推量するが、前 6 世紀第 3 四半期には確実に併合されていた。ペリオイコイの重装歩兵の存在は考古証拠に基づいて前 6 世紀半ば頃に存在したことは事実である。このような知見から、ペリオイコイ制度の制度的確立は Finley の「スパルタ革命」に絡んでいたと思量すべきであろう。

(2)ほぼ 6 世紀半ばにスパルタ国家の基本構造が固まったが、ペリオイコイがラケダイモン人国家に統合されるのもこのときと考える良いのではないだろうか。スパルタを中心集落として、ラコニアとメッセニアのヘイロータイの耕作する地域を支配するスパルティアタイの国家とポリス・スパルタに従属しつつ、独立して、いわば同盟者として多中心的構造で存在していたペリオイコイ諸地域がラケダイモン人の国家に統合される。軍事的には、職業的兵士化したスパルティアタイとは同じ部隊を形成せず、ポレマルコス of 指揮を受けつつ、ペリオイコイが別部隊を形成し、王の指揮下に統合されている。ペリオイコイが「ラケダイモン人の国家」に前 6 世紀半ばに統合されるという見通しを示すことで、独自の知見を示し、あ我が国のスパルタ研究に新境地を開いた。

(3)ペリオイコイ共同体がアウトノモスでないがゆえにポリス(city-states)ではないという認識は最近の議論の進展で成り立たなくなっている。とりわけ Mertens の主張する、ペリオイコイ集落はポリスの下位区分で、アテナイのデーモスの発展段階にも達していないとする見解は退けられる。Lex Hafniensis de Civitate に基づいてペリオイコイ集落の一部はポリスと認められるべきだと論証し、ポリス概念を広げ多様化する必要性を示した。もちろん、我々が個々のペリオイコイ集落の有り様を検討してきた結果からは、すべてのペリオイコイ共同体をポリスと認定する訳にはいかない。ポリス段階

に達していない集落が存在したことを認めるべきであろう。そしてペリオイコイ共同体は、Shipley の述べるように、小さな三次的地区から、テウトロネやコテュルタのようなギュテイオンの近隣に位置する、あるいはクリュサファなどのようなはっきりとした可耕地地域を支配している、二次的あるいはサテライト的中心を介して、プラシアイ、ゲロントライ、ギュテイオン、キュッパリシア、エピダウロス・リメラそしておそらくはボイアイを大中心とする地域構造を形成していたと考えられる。スパルタがラコニアに勢力を拡大していったときに、このような地域構造が存在していたかどうか詳らかではない。しかし、スパルタがラケダイモニオイ意識を梃子にスパルタ周辺のポリスや集落をペリオイコイとして位置づけ、スパルタを中心とする垂直的構造を作り上げて行く過程において、平行して多中心的な地域構造が形成されていったと考えて、あながち大きな誤りではないだろう。ペリオイコイ集落はスパルタの勢力下に緩く統合され、自治を持つ共同体として取り扱われながら、1 つの大中心スパルタを核に 1 つのヒエラルキー的地域統合を形成するに至ったのであろう。スパルタの北部国境地帯がペリオイコイとは異なる独自の国政上の位置を有したという Shipley の見解については、テュレタティスについては認められるものの、他地域については明確な証明はできなかった。

(4)前 6 世紀の半ばにスパルティアタイが外交・軍事の決定権を握るラケダイモン人の国家が立ち現れた。ラケダイモン人の国家の成立が垂直的統合の表現であるとするれば、ペリオイコイはラケダイモニオイとしてラケダイモン人の国家の構成員であると共に、自らの共同体の構成員のアイデンティティをそのエトニコンで表現した。そしてラケダイモン人の国家の意思決定権はスパルティアタイに委ねられたと考えざるを得ない。ラケダイモン人の国家の

成立はペリオイコイの政治的軍事的従属度を高めた。スパルタを中心とする垂直的国家構造はアテネ型の広領域国家との類似を思わせるが、「ラケダイモン人」意識を核にした水平的多中心的構造が古典期において維持され、ポリスと認定できるペリオイコイ集落が存在したことは、スパルタの国家類型がアテネ型に収まりきらないものであることをも示している。古代ギリシアの国家構造をこれまで以上に多様に考察する必要性を明らかにした。

(5)ペリオイコイの町に王のテメノスが設定されていたことは、それ以外の地域についてはスパルタが所有権を認めたことを含意する。ペリオイコイに固有の領域(chora)があったかどうかは明確でないが、ペリオイコイは基本的に農牧畜を生活の基盤として自給自足的生活をしていた。しかし、ペリオイコイ共同体内には明らかに階層差が存在した。ペリオイコイの上層部は重装歩兵としてラケダイモン人の国家の軍隊に組み込まれていたのである。時に彼らがラケダイモン軍の指揮系統の一翼を担った。直接の証拠はないのであるが、Shipleyは、ペリオイコイ重装歩兵はエリートであり、ある種の地域的指揮構造が存在して、個々のペリオイコイの町からの動員は彼らエリートに委ねられ、彼らは戦利品の分配にも与ったであろうと、推定する。そこに、スパルタの支配階級の協力者、利益の共同の受益者像が見られる。こうして、ラケダイモン人の国家はスパルティアタイとペリオイコイの一定程度の統合を示すとともに、ペリオイコイ共同体の内部が分断されていることをも示している。そしてまた、ペリオイコイ共同体が大中心を核に地域的構造を持ったと推定されるにしても、個々のペリオイコイ共同体の規模、成り立ち、経済基盤はきわめて多様であったであろうがゆえに、統一的な身分意識を形成することはほとんど可能ではなかったであろう。ペリオイコイの町の

間の距離的隔たり、全体的な同胞意識がないこと、ましてや階級の絆を持たないことを利用してスパルタは効率的な分断支配をした。さらにまた、ペリオイコイ内の階層差やセクショナルな利害がスパルタをして個々のペリオイコイ共同体内の分断を可能とした。

(6)ペリオイコイにはギュテイオンを除くと我々が都市と呼びうるようなものはなく、町と呼べるものも少なかった。しかし、古典期の史料がペリオイコイをポリスと呼ぶのは現実の反映であり、ペリオイコイ共同体が自治を保持し続けたことの表現であった。それによって、レウクトラの戦い以降スパルタの権力が衰えるにつれて数多くのペリオイコイの集落は都市的発展の明確な兆候を示し、スパルタの支配が取り除かれる時、ラコニア南部と東海岸沿いのペリオイコイ共同体連邦型の結びつきを作り出すに至る。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5件)

- 1 古山正人「キュテラとキュテロディケス」『國學院雑誌』109-62008,1-10, 査読有
- 2 古山正人「メッセニアにおけるペリオイコイ集落の状況」『國學院大學大学院紀要 文学研究科』39, 2008,127-153, 査読有
- 3 古山正人「ラコニア南部地域ペリオイコイ共同体の動向」『國學院大學大学院紀要 文学研究科』38, 2007, 171-194, 査読有
- 4 古山正人「スパルタ北部国境地域の動向と国制上の地位——Aigytiis, Maleatis, Belbinatis, Skiritis, Karyatis, Skotitasをめぐって」『國學院大學大学院紀要——文学研究科』37, 2006, 301-322, 査読有

5 古山正人「ペリオイコイ研究の現状」『國學院大學紀要』44, 2006, 163-189, 査読有

6. 研究組織

(1)研究代表者

古山 正人 (FURUYAMA MASATO)

國學院大學・文学部・教授

研究者番号:20181472

(2)研究分担者

該当無し

(3)連携研究者

該当無し